只見ユネスコエコパーク Q&A(6)

Q ユビソヤナギはどんな樹木で、どのように付き合っていけばよいのでしょうか。

A ユビソヤナギは、大きなもので樹高１５ｍほどになる日本固有のヤナギ科樹木です。１９７２年に群馬県水上町（現・みなかみ町）を流れる湯檜曽（ゆびそ）川で初めて発見されたことがその名前の由来となっています。分布は、青森県を除く東北５県および新潟県、群馬県のごく限られた地域の山地河川でしか確認されていない希少な樹種です。実際、環境省および福島県のレッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）では、絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危機が増大している種）に分類されています。

ユビソヤナギの一生は、河川の増水などにより新しくつくられた砂礫が堆積した場所で種子から発芽、成長し、子孫を繋いでいくことが特徴です。つまり、新しい砂礫地がつくられるような自然度の高い河川がユビソヤナギには必要なのです。逆を言えば、ユビソヤナギが自生する河川環境は自然度が高く、多様な植物・水生生物・陸上動物などの生活の場、水質の浄化、魅力ある景観など多様な機能を持っています。私たちに身近なものとしては、食用とする淡水魚類もこうした環境で育まれています。しかし、これまでに多くの河川において砂防堰堤やコンクリート護岸の構築などの河川改修が行われたことにより自然度の高い河川が少なくなり、ユビソヤナギが自生する場所も少なくなったと考えられます。

只見町では、２００３年に伊南川でユビソヤナギが発見され、民間団体の調査により当時の只見川・伊南川流域は国内最大規模のユビソヤナギ自生地として知られました。しかし、平成２３年（２０１１年）７月新潟・福島豪雨により只見川・伊南川流域のユビソヤナギを含む水辺林の一部が壊されたり、河川改修が進められたりするなどして、河川環境が変化し、ユビソヤナギもまたその個体数や生息域は以前に比べ大幅に少なくなっていきました

近年の全国的な豪雨などの異常気象の頻度が高まる中、人命や財産を守る河川管理は重要なものです。只見町はユネスコエコパークの登録地として、私たちの共有財産・生活基盤である只見川・伊南川流域の良好な河川環境の維持と住民の安全確保を両立した河川管理が必要と考えます。例えば、河川幅を広く確保すれば、洪水対策にもなり、ユビソヤナギなどの生育できるような自然度の高い河川環境も維持できるはずです。自然と調和した河川管理は、自然に優しく、私たちの豊かで、安心・安全な生活にもつながるものとなるのではないでしょうか。

▲早春に花を咲かせるユビソヤナギ

▲自然度の高い河川は只見町の豊かな自然のシンボルの一つ(伊南川)